

氏名	遠藤 亜希子
ヨミガナ	エンドウ アキコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第284号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 マスカーニの声楽作品における歌唱表現の研究 〈演奏〉 マスカーニ作曲 歌曲 オペラアリア 二重唱

論文等審査委員

主査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	吉田 浩之
副査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	佐々木 典子
副査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	畑 瞬一郎
副査	東京藝術大学 名誉教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子

(論文内容の要旨)

「ヴェリズモ(オペラ)」の作曲家、その代表とも言われるピエトロ・マスカーニ(Pietro Mascagni: 1863-1945年)。ヴェリズモの作家ジョヴァンニ・ヴェルガ(Giovanni Verga: 1840-1922年)の作品を原作にしたオペラ《カヴァレリア・ルスティカーナ Cavalleria rusticana》の世界的大成功により、マスカーニはこう呼ばれるようになった。ポスト・ヴェルディ(Giuseppe Verdi: 1813 - 1901年)の時代の非常に重要な作曲家として、その名はイタリア・オペラ史に燦然と輝く。しかし、彼は生涯において15作品のオペラと1作品のオペレッタを作曲し、歌曲や宗教的作品、その他多くの作品を作曲しているにも関わらず、十分に知られ今でも頻繁に上演されている作品は《カヴァレリア・ルスティカーナ》一作品と言っても過言ではない。また、「ヴェリズモ」の作品は、声が圧倒的に言葉より優位に立っていて、言葉が犠牲になったり叫んだりしても構わない、という思い込みを持たれることもある。マスカーニの声楽作品は確かに、歌唱に際し難しいと感じることがあるが、長いイタリア声楽史において、オペラをはじめとするイタリア人によるイタリア語の声楽作品はその創世記の時代からずっと、一つ一つの言葉や詩のリズム、抑揚などを大切に作曲されてきているし、マスカーニの声楽作品もその例にもれないはずだと考えた。また、音楽にも言葉にも常に脅かすことのできない高貴な美しさがあり、歌手もそれに敬意を表しながら、適切な表現を模索しバランスを取る努力をしなければならぬと筆者は考える。言葉には意味や力があり、それを作曲家が重視して書いた作品であるので言葉が犠牲になっていいはずがない。歌手は言葉で、声で、その心情や情景を表現するのだから。そもそも、音楽における「ヴェリズモ」とは何なのだろうか。また、マスカーニの作品は他にどのようなものがあるのだろうか。個人的興味および研究はそこから始まった。

イタリアに渡って勉強を始め、指導を受けるようになってよく「話すように自然に歌う」ということを耳にする。「詩を正しく美しく読むことができていたら、もう歌唱の半分以上のことはクリアになっている」とある歌の先生に言われたことが印象に残った。「canta come si parla」「cantar recitando」など、美しい歌唱には不可欠だと昔から言われてきたことである。話すように歌う、歌っていても詩を朗読し語っているような、詩の朗読や語りがそのまま歌になったような歌唱が美しく理想の歌唱ということであろう。では非イタリア語圏に生まれ育った人間が何をどのように工夫し、どうすればイタリア語を母国語にする人にとって違和感がなく聞かえる歌唱になるのか。イタリア語を理解し話すことは重要であるけれども、言葉を「話せる」だけでは歌唱には十分ではないということが分かってきた。イタリア人が皆美しい歌唱をするわけではないし、逆にイタリア語が母国語でない人でも、とても自然で饒舌な歌唱をする人もいる。そこには研究の余地があると感じた。歌唱のためには、言葉一つ一つの発音や詩のリズム、抑揚、つまり韻律の知識と実践(朗読)が不可欠であり、それが大きなヒントの一つになると自身の実践の過程で感じた。この歌唱に際する基本的なアプローチは、先述のとおりマスカーニもイタリア語の言葉や詩のリズム、抑揚を大切に作曲していたという前提で、歌唱の際に難しいと感じるマスカーニの声楽作品の分析、歌唱表現の模索を行う際にも生かすことができると考えた。もちろん、内容の解釈、作曲家の傾向やどのような意図を持って書いたか探る音楽的なアプローチが必要だ。

マスカーニの声楽作品を考察する上では、《カヴァレリア・ルスティカーナ》を無視して論じることはできない。なぜなら、これほどまでに世界中で今日まで愛され上演機会の多い作品には、それなりの理由があるからだ。本論文では、ピエトロ・マスカーニをまず「ヴェリズモ(オペラ)の作曲家」というレッテルとも言うべき概念から解放し、一イタリア人作曲家として、日本ではあまり明らかにされていないマスカーニの生涯や功績、その作品を紹介する。次に、《カヴァレリア・ルスティカーナ》を様々な面から考察する——そもそもヴェリズモとは、また音楽特にオペラにおけるヴェリズモとは何か。そして、原作とオペラの相違点を洗い出し、マスカーニの作曲技法の特徴とそれに関連した歌唱に際しての難しさについて明らかにする。それを踏まえて、声楽作品(オペラ・アリアと歌曲)の詩のリズムを韻律法に基づいて分析したうえでどう歌唱するか作品の分析を行う。そこから見えてくるマスカーニの声楽作品における歌唱表現の際のヒントを、言葉の面、音楽の面、両面のアプローチから考察する。その歌唱の鍵となる点を、歌手の見地から自身の実践・模索した過程をもとに考察していく。その過程で、他のイタリア人作曲家の作品を歌唱する際にも共通して非常に大切なことと、マスカーニの作品の歌唱の際に特に顕著に見られ留意したほうが良いことと、両方が浮き彫りになった。晩年のムッソリーニとの関わりで後に激しい非難の対象となり、ひっそりと寂しい生涯を終えたマスカーニだが、彼に関する資料や楽譜が失われつつある今、さらなる研究や演奏機会が増えることを願ってやまない。

(総合審査結果の要旨)

「マスカーニの声楽作品における歌唱表現の研究」という題目で書かれた本論文は、ピエトロ・マスカーニの声楽作品に焦点をあてて、その歌唱表現方法において、自然に話す様なイタリア語を生かしながら、ヴェリズモと称される音楽をいかに表現できるかということ、声楽家の視点から解明しようとしたものである。イタリア語とイタリア詩の基本的なメカニズムを分析することで、それらと音楽表現の間のバランスや緊張関係を解き明かし、その成果を生かそうと試みています。マスカーニの作品について、文献や資料も少ない中、図書館から得た作品群や、貴重な声楽曲の楽譜も手に入れている。そして、自ラリヴォルノの図書館に足を運んで、未発表の資料を調査するとともに、韻律学を考察の基礎としてマスカーニ

の歌曲において詩の抑揚と音楽の抑揚がどのような関係におかれているのかを分析し、あるべき歌唱の姿を描き出そうとしています。

作品のひとつひとつの語句や旋律の一音一音に寄り添うように考察を重ね、実際の歌唱にあたっての糸口を探っていく作業を丹念に進めており、声楽家としての、作品に向き合う情熱が論述として紡ぎ出されていく様には好感をもつことができた。

マスカーニの作品において、自然に話す様に歌うことを目指し、その方法を論述しようとしている。ただ、随所にわたって、声楽家にとっては理解できるものであろうが、一般的には分かりにくい表現が多く、論文としては、今ひとつ客観性に欠けるところがあるのは否めない。申請者のイタリア留学によって得られた情報や知識、またマスカーニへの熱い思いは伝わってくるものの、明確な結論も見えにくい。マスカーニ博物館まで足を運びながら、館の閉鎖により十分な資料を手に入れることができなかつたのも残念である。また、韻律学を正面に打ち出そうとするかに見えるものの、その肝心な韻律学的分析に、明らかな間違いが散見されたことも指摘しておかなければならない。

上に記した論文の瑕疵については、修正が可能なものであり、今後のさらなる分析に向けた第一歩として、一定の成果をあげていると言えるものである。

学位審査会の演奏においては、マスカーニの声楽作品の中から、歌曲と、オペラ・アリア、二重唱を選択しており、内容的にはとても意欲的なプログラムとなった。前回の博士リサイタルからはかなりレベルアップした演奏内容であった。申請者の論文で述べている様に、言葉を大切に、自然に話す様に丁寧に歌っており、目標のはっきりしている、非常に好感の持てる演奏であった。より柔らかい自由な身体表現を伴って、高音域の響きと伸びが欲しいところではあるが、イタリア留学の成果を発揮する秀演であった。

申請者の指導教員が複数回にわたって変更にならざるを得なかつたという不運もあって、長くにわたって研究の方向性が定まらないところがあったという状況を考慮すれば、そのような悪条件の中で最大限の努力を払った成果であることは否定できないと思われます。

以上を踏まえて、学位に相応しい成果を上げているものと判断し、合格とした。